

※ 本記事はブログ記事として提供しています。その範囲のものとして捉えて下さい。

「文字を書く」の手前　・「見る」ことと「手の運動性」の発達の機序から-



単語数も 150 を越えていて、日常ではお話を上手にできるのに、書字につながらない…。どうしてだろう…そんなお子さんが対象の今回です。「書く」の手前に有ることを「見る」ことと「手の運動性」から紐解いていきます。

まずは「見る」からです。私たちは文字や形を識別する際には頂点を見取ることを大きな手がかりにしています。図1の「し」でいうならば「始点」と「終点」、図2の三角や四角、五角形でいうならば赤い●の頂点です。解りやすくするために逆から説明すると、図3は頂点を隠した图形を集めた物ですが、頂点が意識しにくくなってしまうと、先生である私たちでも图形を捉えることが途端に難しくなります。なので、頂点を捉えることが、文字や图形の形を明確に捉える土台となっていて、形を捉えられて、始めて次のステップの「書き（出力）」となります（だからシール貼りやペグ挿し、型ハメをするんです）。また、図2の下にチロルチョコ2つの線引き課題プリントがありますが、頂点から頂点の距離が近いほど、形の識別がし易く、遠くなると識別がしづらくなります（ナスカの地上絵とかは地上から見ると形が判別できないのと同じです）。なので、「見ること」が苦手なお子さんの点つなぎ課題は、2点間が短いものから準備して始めていくと良いです（1/2縮小印刷とか）。

次に手の運動性からです。ひらがなを書く際の手の動きを分析すると様々な方向の動きがあります（図4の「は」は習得が難しい文字ですよね）。例えば、

縦線：上⇒下 下⇒上 「り」「い」「し」	横線：右⇒左 左⇒右 「け」「は」
斜線：左上⇒右下、右上⇒左下、左下⇒右上、右上⇒左下 「ひ」「め」「く」	交差：縦線と横線の交叉 斜線の交叉 「は」「め」
の交叉：「め」「あ」	円と線の接触：「の」

こういったちょっと難しい手の動きをする前段階には、指の分化や手首の柔軟性、上肢の回内・回外などの運動の獲得があります。例えば、指の分化から見れば動的な指3本（親指・人差し指・中指）と、支える役割の指2本（薬指・小指）の分化が終わっていないと、えんぴつの握りがハンマー握りになり、外側に返す運動性をもつ文字が書きづらくなります。更に手前の発達段階で、手の平を上に向けられないならば（回外の未獲得）、順手のハンマー握りになり、肘が宙に浮いて書字の方向性は全く安定しません。（机に甲を付くのにも意味があります）

また、タイトル下の図にある殴り書きの種類を、図工作品の中から探すこともできます。最下部図5のように改めて描画と国算プリントを見比べてみると発見があるかも…。



図1

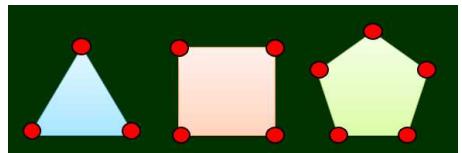


図2

速く書き写してください。
10秒後に消しますよ。

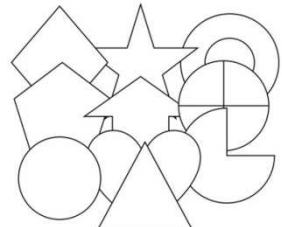


図3



図4



図表3-1 なぐりがきの変化（子どもによって多少発達の順序が異なる）

図5